12/6 赤旗

仕事 住まい失った

困窮者支援の現場 都庁前

新型コロナウイルスの感染拡大の影響に伴う失業や収入減で、年末の寒空の下、住まいを失って苦境にあえぐ人たちが増えています。生活困窮者への支援が行われている現場を訪ねました。（岡素晴）

朝から降り続いた冷たい雨が残る5日の午後1時ごろ。支援団体が食料配布を行っている東京都庁前で、1時間前から支援を待つ数十人の列ができていました。2014年から無料の食事提供と、医療・生活相談を続けている「新宿ごはんプラス」と、NPO法人「もやい」による取り組みです。

以前は月2回でしたが、感染拡大の影響が深刻化した今年4月以降、毎週土曜の開催に活動を拡大しています。

ルームシェアで暮らす東京都中野区の男性(31)は「イベント設営など短期の仕事を繰り返しながら、今まで生活してきましたが、コロナ以降、そういう仕事が本当に限られるようになった。求人があっても、応募が殺到し、かなり厳しい。収入もだいぶ減っています」と話します。

コロナ関係の情報が紹介されているユーチューブ（ネット上の動画共有サービス）の配信で、仕事を失った人向けに都庁で食料支援や相談会が行われていることを知ったといいます。「余裕がなくなってきているから、少しでも生活の支援を受けられ、相談にも乗ってもらえればと思い、通ってきている」と語りました。

新宿駅周辺で3年前から路上生活を続ける45歳男性は「先週まで非正規の仕事に就いていたが、契約期間が終わってしまった」。年末年始をはさんでしばらくは仕事がなく、苦しいと話しました。

1時間前から数十人の列 ■ コロナ前の2～3倍

この日、食事などの提供を受けるために訪れたのは174人。医師で日本共産党都委員会新型コロナウイルス感染症対策本部長を務める谷川智行氏（衆院比例・東京4区候補）は、こう言います。「コロナが流行する前と比べて、人数は2～3倍になり、若い人たちも増えています」

谷川氏は「ごはんプラス」結成当時からのボランティアメンバー。問診票を手に医療の相談に訪れた人から症状などを聞きました。

「この間、相談会で出会った中に、コロナで派遣切りにあった30代の男性がいました。自己都合の退職扱いにされ、住んでいた寮も追い出されて2週間近く路上生活で、3日間は水だけでしのいだといいます」

その男性は、生活保護を受けられるように支援され、住まいも確保できたものの、失業と困窮で、もともと、うつ傾向だった精神状態が悪化。今でも「死にたい」という思いに苦しんでいるといいます。

厚生労働省は11月24日付で、住まいを失った人たちの生活保護申請の受け付けなどの支援が年末年始も途切れることがないよう、必要な体制の確保を求める事務連絡を各都道府県などに向けて出しています。

谷川氏は「これを実効あるものにするためにも、国や都と詰めて具体化させなければならない」と強調します。

党都議団の徳留道信、藤田りょうこ、池川友一各氏も相談会を訪れ、生活困窮の実態を聞きました。

感染防止対策をとりながら、食料などの配布準備を進める支援スタッフら＝5日、東京都庁

年末年始 対策は急務